

十二月に入って遂に冬がやって来たなと思った、というのは今日がすごく寒く感じるからなのです。十二月になったから冬だというのではなくて、寒いと実感できる、今日が寒い冬の季節が来たかと体感しています。もっと寒い地域の人にとっては「え、寒い・・まだまだ暖かいよ、此処らは」と言われるかも知れないけれど、温度計はおそらく室内で10度ぐらいだろうけれど、まだまだ水が凍らないけれど、雪が降る、曇りが降るという状態ではないけれど、というのは、暑い寒いと比較の問題でこの地域では夏の30度から冬の0度と30度の温度差、北海道では夏の20度と冬のマイナス10度と30度の温度差、是は同じではないのですかとはい、オレの屁理屈なり。オレが寒いというのは、なんだか先日まで暑いと汗をかいてタオルで拭いて冷たいものばかり飲んでいたので昨日のよう・・ということは、日の経つのがオレの頭の中で早すぎるのか、オレの体感温度にボケが出ているのか・・。

「今までで、一番寒かったのは」と聞かれたら、何年か前の正月の八ヶ岳の麓、赤岳鉱泉のテント場で二日間一人で寝た時といつも言っています。一日目、天気が悪く退散と思ったが、昼歩き過ぎてもう一泊、ダウンのシラフ（寝袋）は一日目より湿っている、夜中に寒いのでコンロを点けようとしても火が点かない、プロパンガスが燃えない、しばらくシラフの中に入れてガチガチ震える体温で冷たいポンペを温めてやったら、チョロリと燃えた。後にそのことを話したら雪国のおっさんが、極寒の時はプロパンはダメ、ガソリンコンロでないとダメ、雪の中寒い時はガソリンコンロに限る、と言っていた。昔はプロパンコンロは無く、コールマンのガソリンコンロを愛用していた。愛用と言ってもなかなか利かん気の悪い、相性の悪い奴で何度か大きな炎をあげてあわや爆発、あわやテントの火事なんて事が5.6回もあった。ガソリンを圧縮する手押しポンプを指で上げ下げして、チューブから着火剤を出し塗り付け、ライターで火を点けると、勢いよく炎が噴き出した。すぐに潰れて4回ぐらい買い換えた頃にプロパンコンロが出始め、それを購入して今まで買い換えることも無く同じ物を使っている。コンロの燃える部分が色々改善され、より軽量によりよく燃えるようになったらしいが、オレのコンロは初期の重い奴のまま。話はそれでしたが、そのテント場の前に氷壁の練習場があった。工事現場の足場パイプを何段も積み上げた骨組みにポンプで水をかけて20メートルぐらいの高さの氷壁を作って、登る練習をしていた。ザイルを身体に巻いて、カマキリのように両手のピックルとアイゼンでよじ登って遊んでいた。昼間でもマイナス10度ぐらいの温度だから夜はマイナス20度ぐらいまで下がっていたのではと、オレは勝手に思っているのですが・・。あの時はまだ60歳前だったか、超えていたか、いずれにしてもまだまだ元気だったね。

雪の地方の冬の季節、風が吹いて木の枝に樹氷、霧氷が着く。あれはなかなかきれいだけれど、青い空に白い枝はなんとも冬の凄烈さを感じる、寒さを感じる、というより本当に寒いし、寒くなれば風が吹かなければ枝に雪やら霜やらは着かないのだけれども、そんな場所に居る時は一生懸命歩いている時なので身体じゅうがポカポカしていてしかも全身暖かい服装、風を通さない防寒具を身に纏っている、それこそ其処がマイナス20度であったとしても身体はホンワカしている。むしろ寒いのは、寒いと感じるのは身体を動かさずにじっとしている室内かもしれない。狭い室内では多少身体を動かしたところでホンワカするような運動はできない、身体は温まらない。雪の上のテントの中で3人4人、コンロを燃して食事を作り飯を食い、アルコールを一杯飲んで、寒いとはいえその勢いでシラフに身体を押し籠めれば、潜り込めば朝までホンワカ、テントと雖も人が多いとその体温で、人いきれで益々ホンワカである。

と考えると、一人でいる、孤独に過ごすのは寒いことなのである。オレが仕事場で一人で過ごすのは仕方がない、仕事は一人でないとできない、絵は一人でする仕事だけれど、と自身の孤独をさも強調しつつ横を見て人の事を「いつも一人でいる人は寒いのだろうね」なんてね。

私は“カン”と名乗っていますが、家族はカンとは名乗っていません。カンと名乗っているのは家族の中で私だけです。熊本の郷里に帰ると“テツオ君”と呼ばれる、そう呼ばれるとホッとすると、講演の最後に彼がこう言った。ジワリうれしくなった。彼のカンという名は雅号かな、画家が、文筆家が持っているような雅号かもしれないと思った。雅号などとお前はノーテンキ（和製 no+touch）だぞ、との雑言があろうとなかろうと、それでよし。このことで思い出すのがオレ高校3年生の最後、クラスでお別れの一言を言いあう席で、Nさんが「私は朝鮮半島出身者2世です。今から大学医学部に入り医者になり、祖国に帰って医者として国の為にくしたい。名前もNではなく〇〇と名乗ります」その挨拶を聞いてオレいい話だと思った。あれから半世紀も経って最近聞いた話、彼女は大阪の生家近所で開業医をしているらしい、是また嬉しい話。オレが20歳前後から朝鮮半島出身者2世の友人たちが、朝鮮読みの名前を名乗り始めた。これはいいことだと思いつつ、名前の音がピンとこずカタカナで何度も書かないと覚えられなかった。

茨木市役所の横にホールの建物が在るが、こんな大きな舞台が付いたホールが在るとは知らなかった、初めて来た、もう30年40年前から在った様な気がする。「今日は満員、岡村さん上に上がって」と言われて階段を2.3層上がった処に在る扉を開くと薄暗い中に人がいっぱい、また階段をもう2.3層上がったらなんだか天井裏かなと思われる処に扉、開けると此処は人がまばらだが舞台ははるか彼方に在る、まさに天井棧敷。開演までまだ10分ぐらいあるが、こんな天井裏の座席にも人がバラバラ登って来た。

余談だが、西宮の兵庫県立芸術文化センターは評判がいい、以前は大津の滋賀県立芸術劇場びわ湖ホールそして大阪城付近の泉ホール、梅田付近のシンフォニーホール、オレが演奏会を聴きに行ったのはそれぐらいだけどみんな素晴らしかった。茨木のこの大ホールも中々のものだけれど、こんなでっかい箱モノを運営して客を呼ぶのは大変だぜ、市役所は維持管理が大丈夫かなと老婆心。美術館もあれば便利と思うけれど、年に一回の市展だけではこれこそ箱モノの典型になりそうだ。

この講演は人権がテーマ、市の人権センターの主催の講演会、最初の挨拶に我らが三木先生出場、今年の話、今年、国民みんなが喜んだ日本のオリンピック選手たちの活躍の話、中山先生のノーベル賞受賞の話を一サッと纏めてあっさり爽やか、さすが元校長先生、上手いものだ。

2時の開演、カン先生が現れたのは20分ほど過ぎていた。TVでおなじみの小声、まず語り出したのがバラク・オバマ・アメリカ大統領の話。アメリカ国民は2期目の今回も彼を大統領に選んだ。選ばれた彼は今現在、選ばれる実力、実行力、行動力、ビジョンが在るのだろう。アメリカ国民は彼の出自をものともせず、そんな事は小さい事つまらない事、それよりも今の彼を、今のアメリカ人が望んでいる彼を大統領に選んだ。日本も含めて長い歴史のある国では、出自、何処の馬の骨、先祖、係累がうるさく囁かれる。オバマ大統領は黒人で、アメリカ本土で育っていない、ミドルネームがフセインという、そんな事こんな事が日本人なら眉を顰めそっぽをむくのではないだろうか。

それともうひとつの話が、日本の大学の話。彼は東京大学に勤めている。東京大学に入ってくる学生は家庭的に教育熱心で裕福、また学生同士も同じような人たちとしか付き合わない、交わらない、みんな同じ金太郎あめ化している。university 大学は universal 普遍的に何者とも交わらなければいけない。あらゆる人が交わって理解闘争変化同化と化学変化に似た作業を経て人ができてくる、すごい奴ができてくる。反対に金太郎あめになれない人、過疎地の子、貧乏人の子、親が無学の子は東大には来れない、その時点で弾かれてしまう、10歳代で弾かれた人は、日本では再起のチャンスが少ない。

二日も経って彼の講演の趣旨内容が間違っているかもしれないが、このように聞いた。『出自による差別区別はアカン』

『いい大学に入るのが人生の目的という、十代で決まってしまう人生はアカン』とオレは拍手、だけど、なら、どうする、どうしたらいい・・・。TVでおなじみ、人気のあるカン先生、彼の今の叫び、現状に対する怒りというような本音を聞きたかった。そんな事を言ったら、吠えたら、人気が下がるかな。

図版は5年前に描いた「わたしはわたし」

0131 絵手紙の事 091212

10年ぐらい前に、地域の公民館講座で絵手紙を教えてくれないかと依頼を受けて、絵手紙なんてわからんな、知らんな、と思いつつも始めた。絵なら教えられる、水彩画、色エンピツ、パステルで描くぐらいならなんとかなる、なんとかなるさと生来の気質が後押しして始めた。みなさんが思っている、知っている、宣伝されている絵手紙とは違いますよと初めに言いつつ教えている。生徒の方々はほとんどが中学生、高校生以来筆を握ったこともなし、絵を観に行くようなこともなしの人ばかり、私は絵はダメ、絵を描く、絵が描けるとは思ってもいなかった、ちょっと覗いてみようとして来ただけと始める人、60歳代の女性がほとんど。

東京のヒゲ氏、二十歳からの絵の友人で、何年かに一度、四国に向かう途上、我が家で1泊する。何故大変な思いをして車で来るかという、四国をうろうろするのに車は不可欠だという、此処に行ってあそこに行ってと思っても都会のように交通機関が無いという、かと言って車を借りるのは高くつくという。彼の車は常に中古車というより、破棄寸前のボロ車、それなのにオレのように無料で戴くというのではなく、誰かが購入して彼に譲り渡しているとか、考えてみればその方がすごいじゃないのかな。前は軽トラ、今はワンボックスでエンジンは快調だそうだが、外観はボロである、我が家の車が新車に見える。話は飛んだが、ヒゲ氏が絵手紙のことを話していた。「オマエ、絵手紙って、小池が始めたんだぞ。M、知っているだろう。Mと小池が同僚で、小池が学習塾の先生をしている時生徒たちに、頑張れとか、君はいい子だとかをはがきに書いて、絵を添えて送っていた。Mがその画風、その文章に惚れて寝てどんどん書くように勧めた。銀河という雑誌がそれに目を付け、千枚も万枚も書かされて今のように有名になった」それを聞いて納得、Mさんは二十歳の頃何度か会った、墨でオレの名が書かれたはがきももらった、書の専門家だった、ちょっと変わったおもしろい字を書いていた。世間の皆様が言う絵手紙とはそれだったのか。昔から手紙もはがきも字を書いて絵を添える、その逆もいいのだけれども、絵と字が入っていれば絵手紙、取り立てて絵手紙と断わることも無いけれど、言葉として、単語として、フレーズとして絵手紙という言葉が認知されているので、オレは絵手紙教室と称して、水彩画をメインに絵を教えています。

不思議なもので2時間の講座を何カ月かで4.5回済ませると、みなさん見違えるように上手になってくる、モクモクと描いている、「ダメだ、難しい」と言いながら筆が進んでいる。楽しんでいただいているようで休もうとはしない。オレは、「みなさんすぐに、びっくりするぐらい上手になりますよ、いい絵が描けるようになりますよ、人に自慢して見せられるようになりますよ」と笑顔で囁いたり叫んだりしている。オレが少し手を入れると感嘆の声。オレ自身の絵もオレ自身が、少し手直しするだけで感嘆の声が上がれば、上手くいけば、オレの絵も売れるのだが・・・。

若い頃は人の話を聞かなかったせいなのか、え！と驚かされる意見、感想が出てくる。知人の中で絵や書を始めた人が、絵の話、アートの話をしているのに話さえダメですかと会話が止まってしまう人がいる、とんでもないことを言う人がいる。思想とか思考とかという大層な問題ではないのに。絵の事、書の事、アートの事で「これはこうでないといけない」「これも、これもだめ、これしかだめ」と自身で固執されている方、そう戒められている方、他の物を見ない、聞かない、考えない、と直情一直線の方とお会いすると、びっくりする、あっぱれだが、ちょい寂しい悲しいとも・・・。そんな風に頑なに絵を描いて書を書いて表現されている。「ええい勝手にしろ」と思いつつも「話のできない人だな」とも諦めている。オレが芸術の、その芸術表現の考え方進め方は、もっとおおらかで簡単「何でもあり何

をしてもいい、いいものができたらそれが最高」と考えている。だけどいつも言っていますが「媚びてはダメ、化粧の為の化粧もダメ、よくないものは何と言いつてもダメ」とも言っています。プロもアマも絵を好きになって、絵を観る事描くことを楽しんで、いいものを創りましょう。

0132 莊子の話 121212

莊子という人がいた。2500年前の中国に莊子という人がいて、人の生き方、ものの道理を説いていた。老子やら莊子からの教えを道<タオ>というそうだが、オレはこの歳まで知らなかった。なるほどこんなに面白い考え方、想い方が在ったのかと知ったが、今まで知らなかったというのはどうもオレだけのようで、たくさんの古今の人たちがこの道、道教の影響を受けている。中国では儒教・道教・仏教が三大宗教として存在していたらしい。しかしオレとしては莊子や老子がこう言った、こう書いているという文章を読んでいるのが楽しい。莊子の言っている事、書いている事は、いかにも楽しい面白いが、これが教えで宗教だとは思っていない、なのでこれからも老子、莊子の言っていることをくすくす笑って楽しんでみようと思っている。時を経てそれ以後色々の解釈、教えが出てきて道教<タオ>となったそうだが、道教の中には首をかしげる部分も出てきたりして、オレには、是はちょっととか、是は違うんじゃないとか、これはいかにも怪しげだな、という部分がある。三大宗教に対して文句、注文、チャチャを入れるつもりは無いが、そんなこんなを、これから書きだして行こうと思う。オレの寝言、ぼやきかな。ただ今はこう言っているが時間が経って反対の話をしているかもしれないのでその時は、バカな岡村がバカな事を言っている、と捨て置いて下さい。

未だに日本の中に茶道、華道、柔道、剣道とうような言葉が溢れている。これらも道<ドウ><タオ>に通じる言葉らしく、花を飾る、茶を喫する、格闘技、チャンバラをする、でいいと思うが、花を飾るという道、格闘技をする道とわざわざ道という字を付ける、それによってそれぞれの中に神秘性、精神性を感じるという。普通に生活に定着している言葉で、オレも含めて普通に使っているが、それがどうしたと言われそうですが、ちょっと待って下さい、是はなんだかおかしいよいつも思っています。たとえば花を飾る事、飾られた花を観て楽しむ事、それを儀式、儀事にして道<ドウ>と名乗って、人を並べて、上下左右に並べて、上に立つ者その権威、主人になってピラミッド型の組織、力と資金と権力が集中してゆくなっておかしいことだとは思いませんか。花を飾る、花の事を知って、飾る技術を磨いて、よりいい飾り方、よりいい花の世界、神秘性精神性の高い世界、これだけでいいのではないのかな。不思議な事に絵の世界では、絵画道とか、浮世絵道なんて言わないのはありがたい、救いだ。

山、海、森、草叢、これらの自然界賛歌、是はいい、是はオレも賛成、オレは自然が大好きだ、と言いながらも、勝手なもので本物の自然は、地の果ての大自然は人が生きていられない、恐ろしい世界だということも知っている。加島祥造先生の一文を参考にします。東洋的な「自由」とは、「自(みづか)らに由(よ)る」ものであり、外の他者に求めない心を指す。それは社会の中のルールや道徳や形式から自分の心を開放することだ。解放は少しずついい。少しずつ、自分の内側に、自分を生かすエネルギーへの自覚を持ち始める。社会環境からの自由は外側の条件に関わることだが、<タオ>の自由とは自分の内側の「自在なエネルギー」につながることなのだ。宇宙エネルギーとしての<タオ>このタオは社会のルールに関わらないで、自分の内に、命として、自然に動いている。それが社会ルールを超えて動いていると意識した時、人は社会ルールの中に居ても「自由」を味わうようになる。

と難しい一文なれど、自然賛歌、ネイチャーの中に身を置き、少しでも長い時間その辺りの空気に触れ、呼吸することはオレにとっても素晴らしい。自身の内側で、沸き起こらねば。

魚の絵が描きたくなった。「尾羽うち枯らし 嘆くな 愚痴るな 少しの 酒を口に含み 草叢に立てば 心がスイーと 気持ちがホッと なんとかなるさ 宇宙が見える」

余談ですが 12日12月12年の数字に気付きましたか。もちろん絵のサインもしましたよ。

0133 66歳 161212

昨日は66歳の誕生日だった。同年輩のどなたもが、「還暦だとは・・・」「古稀(70歳—人生古来稀なり—杜甫)だとは・・・」と感嘆、驚き、たまには嘆きの様で眩く白髪皺くちやの元気な老人に出交わすが、オレも正に眩きたくなる、オレが66歳、オレが老人、オレがみんなの中で一番の年長者だとは。

その前日バドミントンの忘年会があり、40歳代の母さんたちと、50歳代のおっさん達と一献。Happy birthday to youと合唱してくれ、ラケットの振り方を教えられ、こう持つ、違うこうだと3年もやっているのに基本ができていない不甲斐無さに大笑い、陶酔の中、気宇壮大とまでもいかないが心持よく熱爛をちびりちびり、楽しい仲間と楽しい時間、やはり飲み過ぎたと朝起きて反省。

朝飯を食って座るも気怠く重い、字を書く気にも絵を描く気にもならない億劫な気分、天気までもが今にも降りそうな曇り空。Mr. Higaの写真展を観に行こうか、ついでに絵の具を買いに行こうか、写真展だけにしようか、電車にしようか、自転車にしようかとさんざん迷った挙句、ヤッケの上下を小さいリュックに詰めて自転車で出発。大阪方面に自転車で行くのは1年ぶりぐらい、今までなら、よし行くぞと即自転車を漕ぎだしていたが、今日は気重になっている自分を叱咤。

実は大きな声では言えないが、友人たちに、家族に、NY在住の友人の展覧会があるのでそのオープニングパーティに行ってくるとさんざん話してでかけたのが先月。案内状に赤い字で11月〇〇日オープニングパーティと書いてあって久しぶりに会えると出かけた。会場は梅田、阪神方面、最近再開発でどんどん新しいビルが建って、その中層階にniconのギャラリーがある。今風のエレベーター、ボタンまでもが観たことも無い格好よさ、ボタンまでこんなに変わってきたのかと感心しながらカメラが展示された処に立っていたら、ご案内しましょうかと係の女性、はがきを見せると、是は本日東京会場でございます、大阪は1カ月後の12月に、こちらのギャラリーで開催しておりますので是非またのお越しをお待ちしております、と言われ、あっちゃっちゃ、またやってしまったかと苦笑。

今日はMr. Higaは居ないだろうと思ったが受付に座って新聞を読んでいた。先生とはもう12.3年ぶりぐらいか、NYに行って、1カ月世話になった、学校の寮に泊まって絵を描いた。懐かしいアメリカ生活、アメリカの土地、いい絵が描けた。Mr. Higaは日本の美大を出てアメリカに渡って、今は写真家だ。石を、沖縄の岩石をモノクロの写真に並べている。奇っ怪な石や岩の数々が迫力あっていい、楽しい。

その後難波に回って帰った。茨木から毛馬の閘門まで1時間。梅田まで30分。10時に出て2時に帰りついた。淀川の河川敷は車が走っていないのでぐんぐん飛ばせる、風を切る、酒なんか飛んでしまえ、フルスピードだとはしゃいでいた。この河川敷の道路には所々に車止め、自転車止めの金具があってその都度止まらなければならない。はなはだ不快腹立たいが、土建屋さん曰く、その道路は河川整備改修の為の道路で、一般人が利用するために造られたものではないので普段は通行止めにしてあって、歩行者や自転車ぐらいは通ってもいいですよと開放している、と聞いた。順法に人や自転車が使う分には全面的に国民市民に開放すればと思うが、車や単車で暴走する奴、ゴミを捨てに来る奴といろいろ出てくるかもしれない。

何人かに誕生日おめでとと言われて、一日が過ぎた。

0134 自然と破壊 231212

冬に入って毎日のように訪れる河川敷の風景が寒さ冷たさの故か一段と冴え冴えしてきて、まだ昼過ぎの2時頃だというのに、陽の光は斜めに傾き、ススキの穂が、綿毛のようになったススキの穂の大群がふわりと白く浮かび上がる。

土の上の草々はほとんどが茶褐色に枯れている、その間にまだまだ緑色を保っている葉が草が茶褐色の隙間に見え隠れする。ゆったりと静かに流れる川の水は、ある処では深い緑色に、ある処では空の色を写し込んで青色の中に雲の白さを朧（おぼろ）げに感じさせ、そしてある処では陽の光を浴びキラキラ眩しく輝き、その傍では鈍い明るさを反射してどんよりと光る。

先日も懐かしい友人と小学生時代の昔話が淀川の話題となった。思えば何時も淀川の傍に居た、家も学校も淀川の傍に在った。淀川の傍に居て、土手の上を歩いて、土手の中に降りてよく遊んだ。土手の中は自然がいっぱいだったというよりは自然しかなかった、今のようにコンクリートも鉄も豊富に無かった時代、草と土と水と生物たち、それしかなかった。土手の上をボンネットバスが走っていた。

汚染だ、排気ガスだ、環境問題だと喧（かまびす）しく言われ、その環境問題が徐々に解決しつつある昨今、大都会大阪近郊に在るこの川も、水が透き通ってきたように見えるが、この水をそのままコップに汲んでゴクリとは飲めないどころか、この水を触ったら水道水でもう一度手を洗いたくなる。この水を飲めば忽（たちま）ち腹に障る、腹痛になる、病原菌をもらう、寄生虫をもらうといくらでも悪い事が頭に浮かぶ。こんな事を言えるのはいつも山の中に入って、この水なら大丈夫、この水はうまい、これはきれいだけれど不味いと言いながら、いつも流れている水をゴクリと飲んでいるからという事。

先日チベット旅行にはまっている友人たちとの話の中で、あちらでは水がいけないとか。食堂でもレストランでも出された水を飲むと腹を下す。上等のホテルでウイスキーの水割りを飲んだだけなのと言いながらふと考えて、氷を作る水が原因かと分かったという。そんな話のすぐ傍で、それは君たち軟弱すぎる、か弱すぎる、現地の人たちはその水をいつも飲んで元気に暮らしている、もちろん私も現地の人たちと同じようにその水をいつも飲んで何の支障もない、要するに君たちが軟弱すぎる、か弱すぎるだけの事なんだ、と・・・。

汚してはいかん、壊してはいかんと常々思っている、叫んでいるが小さい声ゆえ届かない。背広にネクタイを締めた連中が、文化だ開発だと謳（うた）って工事を進めていく。オレ、秋から 2.3 回安威川上流を抜けて豊能、箕面の方に要事があった。車がスイーと走れる立派な道路ができていく。この道路は安威川ダム工事の一環なのかな。ダム本体はまだ姿を表さないが周りの環境は肅々と進められている。この肅々という言葉、オレは嫌だが、背広のおっさん連中は好きだねえ。肅々と進めておりますと言いながら、文句注文は聞かないよ、私たちの思った通り、計画通りに何事も進めていきますよ、と言う事が肅々かと腹立たしい。第二名神のインターチェンジ工事で、懐かしいひと山が壊されている、木が無くなり土が削り取られ、全く前とは違って荒れ果て見る影もない山の姿を見て「あれれ、こうなるのか・・・」と啞然。

車が行き交い、人々が群れ、物がどんどん消費される世界から、川の土手の階段を上がって河川敷への階段を下りるとまさに世界が一変する。なんとここは都会の中の自然界、汚れている汚染されているとはいえ、一歩足を踏み入ると、鳥が魚が、草が木が、水が空気が爽やかに流れる。オレも我がまま勝手なもので、本当の大自然は怖くて近づけないし、遠くの自然はいつもは行けないし、毎日来れるならこの川がいいかななどと言っては失礼な限り、アカンゾ、ゴメンナサイネ。

0135 中崎宣弘展 251212

もうすぐ年末という時に「ビバ クーバ リブレ」展と書かれた展示会の案内状がやって来た。添付の絵を見てこれは面白くないかも知れないと思いながらも、今日しか行く日はないと電車に乗った。出かける前にもう一度案内状をチェック、というのは何回か失敗、チョンボをしている昨今、小さい字が読みづらいと日付と場所だけ見て電車に乗って会場に行ってしまうと、期日がひと月先だとか、地図の見落としで会場がわからないとか、すました顔をして乗っていた電車が、とんでもない処を目指しているにもかかわらず、窓の外の風景を楽しんでいるにもかかわらず、相

当行ってから、いくつも電車の駅を通過してから自分が違う電車に乗っている事に気付くあり様とか、まあこれは生活自体を楽しんでいるあり様で、オレ自身バカな奴だと苦笑すればいいだけの話なのですが・・・。二つの会場が書いてあってひょいに行くとき日違いの失敗に懲りてもう引っかからないぞと、今回も二つの会場が書いてあるが、これはいかんぞと目を凝らしてみると、一日だけ別の場所で彼が講演をするとか、もう少しで引っかかる処だとそれも苦笑。

会場にはいると 60 センチ角のダンボール紙をいくつも組み合わせて絵が描かれている、キューバが見える、キューバを感じる、おまけにチェゲバラの似顔絵まである、おもしろい、おもしろい、これはいい、10 日間のキューバの旅を 1 区画ずつ描いてある。タクシーに乗って安宿に着いた彼。上等のホテルでカクテルを飲む彼。反対側の庶民の街でひと桁安いビールを飲む彼、街の市場の絵、大西洋の荒々しい波の色、無農薬有機農法の畑とそれを耕す人たち。そこで彼の解説、共産国のキューバ、貧困な国キューバはソ連からの輸入品、援助物資がどんどん入ってきていたが、ソ連が崩壊した時点でそれらの物資が入ってこなくなり、農作業用の肥料も農薬入ってこなくなった。それが幸いして人々は無農薬有機農法に変わっていったというのか、昔のやり方に戻って、農産物がたくさん収穫できるようになったという。昨日も東北のリンゴ農家が無農薬有機農法で成功して旨いリンゴ、農薬を使わないので安心なリンゴがたわわに実って、その農法を教えてくださいと人が寄ってくるという話を聞いた。リンゴの木の根元の土が柔らかい、草も生える、虫が来る、鳥が来ると次々自然が自然を呼んでいい方向にめぐりめぐるとか。この話を聞いて虫の数、虫を食う鳥やヤモリや蛙の数、この辺りのバランスがうまくいくと、絶妙のバランスが保たれるといいのだが、そのバランスが狂うと良くない、絶妙のバランスとは俄かには信じがたいが、上手な人はバランスをうまくとるのだろうね。

話は脱線したが自分の旅も人の旅も、旅が終わって絵に、文章に、歌にと纏めあげられたらこれは楽しい、となかなかいい展覧会だった。

ただキューバの事で驚いたのは、今のキューバには元々いた原住民がいない、何故居ないのか、要るのは誰なのかと聞いてびっくりした。今のキューバ人は何世紀か前にスペインを中心に海を渡ってやって来たヨーロッパ人、それと奴隷としてアフリカから連れてこられた黒人がほとんどだとか。元々の原住民は今のキューバ人に殺されたり、伝染病を写されたりで絶滅したとか。このことは全く知らなかったが、すさまじい話だね。

図版は、アメリカ在住の KAWAI さんが、KAWAI さん蔵のオレの絵に額を作ったよと写真を送ってくれた。

0136 淀川 291212

淀川（よどがわ）は、琵琶湖から流れ出る唯一の河川。瀬田川、宇治川、淀川と名前を変えて大阪湾に流れ込む。滋賀県、京都府及び大阪府を流れる淀川水系の本流で一級河川。流路延長 75.1km、また、琵琶湖に流入する河川や木津川などを含めた淀川水系全体の支流（支川）数は 965 本で日本一多い。第 2 位は信濃川（880 本）、第 3 位は利根川（819 本）となっている。

と wikipedia に出ているが、木津川・桂川・宇治川の三川合流地点の山崎辺りから大阪湾の海までが淀川だと思っていたが、琵琶湖の付け根が出发点とは・・・。難しい話は別にして淀川の話となるとオレにとってその話の種が尽きない。大きな川でこの川の水が枯れたのを見たことは無い、土手の向こう側までは遠い、向こう側はよそだと、こちらとは違うというくらい距離がある。滔々と水が流れる本流の処と、草が茫々と茂っている処があり、その草むらにワンドという水溜りというより池があって、同級生の悪戯鬼がケツの穴まで見せて潜っていた。残念ながらその頃、オレは金槌で、2.3 年後に家の近所にプールができるまで抜き手を切る姿は見られない。

懐かしい思い出は小学校2年生の時、鉄の近代的な鳥飼大橋が完成した。時が経ってその鉄の鳥飼大橋は中央環状線という太い道路の一部となっていたが老朽化で先日来解体が進み、横に新しい橋が作られ、今はコンクリートの柱を残すだけになっている。鉄の鳥飼大橋が出来るまでは木造の橋があった。木組みを鉄と同じように三角形に組み合わせて長い土手と土手の間を結んでいた。昭和20年代、木造とはいえ人もバスもトラックも荷車も通っていたが、台風の水の勢いで橋が壊れ、新しい鉄の鳥飼大橋が出来るまでの間、渡し船とバスに乗って守口方面に行った事、木造の橋の形などを覚えている事などから、少なくとも4.5歳までは木造橋があったのだろう。

鉄の橋の工事は当時としては大工事で殉職者も何人か出たと聞いている。鉄と鉄を組んで結ぶのに、ドンドンドンと鉄の鋏を何個も打っていた。河川敷に窯を作って鉄の鋏を真っ赤に燃やし、大きなペンチで挟み下から上まで投げ上げていた。上ではメガホン状の筒を持った職人が上手にその真っ赤な鋏を受け取り、鉄の穴に突っ込んで機械のハンマーでドンドンドンと鉄の鋏をか締めていた。子どもながらに真っ赤な鋏を投げあげ、高い処で命懸けで鋏をキャッチするというその作業をその姿を未だに覚えている。特に夜など空中を真っ赤な塊が飛び上がるのは見飽きなかった。今でも淀川の河川敷に行ってみて鉄の橋の一番上までは、ビルの5、6階ぐらいの高さはあるので、当時のおっさんたちよくも投げたり、よくも受け取ったりと感心する。工事が終わってオヤジの知人がスクーターに乗せてくれ料金所の手前でUターンをした。鳥飼大橋は出来た当時有料だった「これで、ただだ」と笑っておられたが、オレは子ども心に罪悪感が持ち上がり首をひねった。

しばらくして小学2年生の時、昭和天皇が橋を通るといので学校から全員鳥飼大橋の手前に並んで待った。黒い箱型の車に乗った天皇が黒い帽子を振っていた。年配の人たちはムシロの上に座って感激して手を振っていた。もうひとつの思い出が、オレの居た近所、鳥飼大橋の手前に墓があって、焼き場もあった。友達のおばあさんが亡くなって友達に付いて行った。棺桶を置いて薪や藁を並べみんな火を付け、燃え上がったのを見届けて外に出た。あとは知らない。

評論家が講演で「昭和30年代までは日本人は飢えていた」と語っていたが、当時オレも青年も大人も腹いっぱい旨いものは食って無かったと思う。憶良(やまのうえおくら)が言うように、「自分はまだまだだが、もっと貧乏な人たちは何を食い、あばら家で寝て、ボロを纏っている」というように、日本中が貧しかった。当時、子ども時代のオレがアメリカの画像映像をみて、夢の世界のようだと思っていたが、たった50年で日本が当時のアメリカ風景と同じようになった。たった50年で世の中が変わる、これは歪みだ、といいながら、「おまえもその中に生きているのだぞ」と言われるのが恥ずかしい。

0137 無肥料栽培 301212

何人かの友人知人が趣味として、農作業を楽しんでいる。畑を借りて野菜を作っているという話が年々増えてきた。オレは農作業が苦手だ、何度か挑戦したけれど上手くいかずもうしない事になると諦めている。オレ自身仕事柄物を作る作業は知っているつもり、同じように農作物も作る作業、初めに全体の流れを考え、初めに準備する物を、初めにする作業は何か、と分かっているがなかなかそれが出来なかった、というより、何も考えず何も気にせずほったらかしていた、というお粗末な話で何も実らなかった。これからする話は全く机上の空論かもしれないが、えっと思ったことをぼやいてみます。

先日キューバの農業事情の話聞いた。共産圏のキューバはソ連から大量の物資が流れ込んでいたが、ソ連が崩壊してその流れが細り、衣食住の物資が不足したらしい。食料も自給自足しなければと農業に精を出したが肥料も農薬も無いので、病虫害にやられて思うような収穫が無かったのだろうと思ったが、豈図(あにはか)らんそれは最初の何年間か、人々は飢えたいらしいが、肥料も農薬もない事が幸いして、農作物が収穫できるようになってきたという。その話の裏には人々の大変な努力があったと思うが。

相前後して東北のリンゴ農家で、農薬が身体に合わない農家が無農薬、無肥料に挑戦して苦節何年、たわわにリンゴが実る畑を作ったと映像で見た。農薬を嫌い、肥料を嫌い農作物が出来ないだろうという常識を覆したという話。



同じような話を続けて聞いて本当の話なのか、農薬を散布しないと虫に食われるのでは、化学肥料ではなく牛糞を撒けば土が肥えて豊作になっていいことではないのかと調べてみた。聞きかじりの話だけれど、オレは買わないけれど、有機農業が一番いいと思っていた。有機農法と宣言している農作物、有機栽培と謳っているコーナーの農作物は「人の身体にいい、やさしいが、価格も高い」ぐらいに思っていた。調べると無肥料栽培という言葉に出会ったので、紹介してみます。

肥料や農薬を使わないといってもほおっておく、放任ではない。その土地の作物と土壌と雑草の関係を調べ理解した上で作物の世話をする高度な知識と技術が必要。

草木は人の手を借りなくても、青々と茂る成長する力を持っている。と言われると山でも川でも森でも、草も木もどんどん茂っている、どんどん新しい芽吹きがある。

病虫害というが、草木が弱ってくると病虫害が寄ってくる、強い草木を作ろう。この話は人間にも当てはまる。「ああ」と悩むと胃腸がおかしくなる、身体を動かさないとだるくなる、考えないと益々ボオツとしてくる、生きものとして人も動物も植物も同じだ、オレも同じだ、よくわかる話だ、反省。

日本で有機栽培というのはほとんどが牛糞鶏糞だそうで、それをどどん耕作地の撒くのが土にとって本当にいいことか、何か偏らないか。牛や鶏の飼料は遺伝子組み換え操作がされていないか、抗生物質が混入されていないか。人間の食糧にもなる作物を飼料にしていないか、貧困国の人たちの食糧を奪って飼料にしていないか、とこちらの人もぼやいている。

日本の農業で、化学肥料・農薬の使用量は世界的にも相当多いらしい。

ただこの無肥料栽培方法がベストではない。まだまだいろんな方法が研究の必要があるだろうと書かれている。

これらを読んで、国が国内の農作業についてもいろんなことを決めている規制していると思った。人の口に入る物、食糧生産ということだから、おかしなことをする奴、おかしなものを混ぜる奴、おかしな農作物を作る奴、これらはいけないけれど、そこまで網を張らなくてもという規制条文があるようだ。もっとのびのび旨いものを、元気な作物を自由発想して作ってくださいよ。国は農業も教育ももっと現場に任せたらと思う。現場任せにすると、とんでもない奴、とんでもない事件が起こるとおっしゃるけれど・・・。

図版はミレー（フランス）「落ち穂拾い」農作業という関連だけで紹介します。

バルビゾン派 19 世紀それまでの伝統的な題材、宗教や宮廷から、自然主義を主張して、森や田園風景を題材にした。当時の農村社会、自らの労働だけでは充分でない貧しい人々に、刈り取った後の落ちている穂を持ちかえる権利が与えられていたそう。